

ワールドワイド携帯電話四半期動向

2007年5月1日報告

2007年1Q(1-3月)調査結果 目次

1	2007年1Q(2007年1-3月)結果	3	7.1.	2007年1Q(1-3月)需要動向	23
2	地域別累積加入推移	8	7.2.	地域別端末最新状況	25
2.1.	BRICs 加入推移	11	7.2.1	アジア	25
3	方式別加入推移(四半期別)	13	7.2.2	北米	25
4	2007年加入者予測	16	7.3.	2007年メーカー別需要量予測	28
4.1.	地域別	16	8	Nokiaの2007年1Q動向	30
4.2.	方式別	17	9	Motorolaの2007年1Q動向	33
5	主要オペレーター加入者数推移	18	10	Sony Ericssonの2007年1Q動向	36
6	地域別オペレーター最新動向	22	11	Samsungの2007年1Q動向	39
6.1.	アジア	22	12	LGの2007年1Q動向	42
6.2.	欧州	22	13	5社以外の2007年1Q動向	45
6.3.	北米	22	14	端末各社の出荷計画	46
6.4.	中南米	22	15	製品在庫状況	47
7	端末需要動向推移	23			

2007年1Qの世界の携帯電話市場概

加入者数推移

1-3月の新規加入者数は前期4Q対比10%減になった。オペレーターの中には1Qでプリペイドの非稼働ユーザを整理することもあり、減少幅はやや割り引く必要がある。特に欧州オペレーターは年度末の12月を避けて3月で実施することが多い。

地域別では欧州、北米、中南米で新規加入者を減少させたが、アジア地域は4Qの新規加入を上回った。世界の加入をリードする中国、インドは共に4Qの新規加入を越え、それぞれ2,000万件前後の新規加入件数を達成した。アジアでは中国のほか華僑圏で旧正月を迎えることから、南アジアも堅調な新規加入を獲得したものとみられる。

方式別では新興国を中心にGSMが好調に新規加入を増やしたのに対して、CDMAは中国、インドの低迷、中南米でのGSMオーバレイの本格化、日本、韓国、米国のEVDO転換により世界全体のCDMAの新規加入は前期4Qに対して半減の規模になった。今後CDMAは新興国での採用が進まない限り、フェードアウトの可能性もある。

次世代では韓国の HSDPA の加入が 2007 年に入り増加に転じてきた。2006 年春から商用サービスが開始され徐々に加入を増やし、2007 年に加入が急増した。次世代も EVDO と HSDPA (WCDMA) 競合時代に突入し、端末助成金復活も絡んで活況を呈している。

WCDMA は西欧が 1Q で反動減になったものの、アジアでは日本、韓国、台湾で加入を増やし、下支えた。日本では 3 月末で WCDMA の累積加入が全体の 45% に達し、来期 6 月末には過半に達する見込みである。

端末需要

1Q の端末販売台数は前期 4Q 対比 14% 減になった。至近の傾向では前期 4Q に対する下落率は 10% 以内に収まっていたが、2 桁以上の減少は 2003 年 1Q 以来 4 年振りになる。

1Q では大手 5 社の内 Motorola の業績が悪化、収益は赤字に転落した。端末部門の営業損失は 2001 年 2Q 以来になる。Motorola は前期 4Q で大きく端末出荷を拡大し、その結果年末在庫が溜まり 1Q で値下げを伴った大幅な流通在庫調整を実施したことが赤字要因になっている。製品展開では RAZR の後継ハイエンドモデルの不調もあるが、期待された超ローエンド Motofone の不振が響いた。

Motorola は超ローエンドの抜本的な見直しに着手しているが、上半期での軌道修正は困難とみられる。ローエンドについては自社生産から再度 ODM に戻し、当面は W シリーズでカバーする方針で、超ローエンドについても同様の生産形態が予想される。

もたつく Motorola に対してローエンドのプロダクトミックスを強化したのは Samsung である。5 社の内 Samsung だけが前期 4Q を上回る端末出荷を実現したが、出荷ベースではローエンドの貢献度が高い。Samsung はハイエンドのブランドイメージを重視しているが、事業トップの交替を契機として、シェアと収益性の両面重視に事業戦略を転換した模様である。1 月から 4 月までの部品発注は生産能力に近い発注規模で、今後はローエンドの外部生産委託を視野に入れた事業展開を加速するものとみられる。現在 Samsung はプレミアムローエンド分野に進出しているが、超ローエンドへの展開も現実味を帯びてきた。ただ新興国向けの販路拡大はマーケティング費用が高むため、収益性といかに両立させるかが課題になってくる。

ローエンドへ戦線を拡大した Samsung に対して LG はミッド、ハイエンドに経営資源を集中したため 1Q の端末部門収益率は急速に改善し、ASP (平均端末販売単価) は初めて Samsung を上回った。

製品構成では PRADA フォン、Shine を西欧以外にも販売を拡大することから収益性は一層改善される見通しである。ボリューム面では 2Q 以降に GSA 入札による 100 ドル 3G 端末 KU250 の出荷をスタートさせるため出荷量の底上げ材料になる。ただ 100 ドルに対して生産コストを範囲内に抑えることが可能か不透明感が残る。KU250 は Qualcomm 初の 3G シングルチップ QSC6240 を採用している。

Nokia は端末販売数量が落ち込んだものの、営業収益、ASP とともに好調に推移、業績面に不安はない。1Q ではローエンドウエートを高めたが、ASP は微減にとどまっており、N、E シリーズのミッド、ハイエンドの貢献が ASP を下支えた。Nokia の 2Q の端末出荷は 1Q 並みにとどまる見通しである。注目次期超ローエンド バラクーダは 3Q から出荷をスタートさせるため、2Q は製品リリースの端境期にあたる。

Sony Ericsson も Nokia 同様に例年並みの 4Q 対比になった。1Q では営業収益率、ASP とも前期 4Q を割り込んだ。同社は西欧依存度が高いため季節変動を受けやすい業績傾向をもっている。

2007 年に入り Sony Ericsson はフランス Sagem とローエンドの生産委託契約を結んだ。新興国向け対策の一環で、今後はプレミアムローエンドを Sagem に、超ローエンドを台湾メーカーに委託し、生産委託を併用する考えである。

1Q では 5 社以外に中国ローカルメーカーが GSM を、日本メーカーは WCDMA、EVDO の出荷を増加させた。中国国産メーカーは中国国内と近隣諸国向けに主に GSM ローエンドの販売を拡大した。

Benq は Siemens の後処理から 1Q も赤字を継続した。1Q の端末出荷は 94 万台(同社の公表値)で 4Q を大きく上回った。同社は自社ブランド販売とは別に ODM ビジネスの復活も検討している。

去就が注目されていた韓国 Pantech は債権団体が同社の再建プランに同意した。2011 年まで債務償還が猶予され、追加資金も投入され経営正常化に向かう。Pantech は韓国国内では SKY ブランドに集約し、海外ではオペレータブランド向けに活路を見出す見通しである。